

今橋映子

●東京大学大学院総合文化研究科教授

カタログアーカイブの形成と —— 東京大学駒場博物館資料室の軌跡と学術教育活動の実践

1……………美術批評の場はどこか

現代における美術館、博物館、文学館などの活動の幅は広い(註1)。作品収集、修復保存、研究、常設展示から教育普及活動に至るまで、市民の側から普段見えない活動もまた多々あることだろう。それでもなお、(全国巡回や複数館開催、あるいは館独自などの事業形態いかに関わらず)毎年開催される企画展覧会はミュージアム活動の花形であり、一般市民の側から見ても、その館の活動を最も知る機会となり、学びや憩いの場としても貴重な場となる。ただし、言うまでもなく「展覧会」は一回限りのイベントであるため、その活動の詳細は基本消えてしまう運命にある。何よりもその記録としての役割を果たすのが「展覧会カタログ」であろう(註2)。筆者は美術史そのものを専門とする者ではないが、ひょんなことから、この展覧会カタログの「収集」と「批評」という仕事に20年近く携わってきた。学術教育の現場とミュージアムはいかに「関われる」のか、以下は、その試行と思考の軌跡を記すものである。

筆者の専門は比較文学・比較文化であり、「パリ神話の形成と外国人芸術家」に関する研究(『異都憧憬 日本人のパリ』柏書房1993年、『(仮)写真』の世紀』白水社2003年、他)を経て、この十年來は、明治大正期の美術批評家・岩村透[1874-1917]が、日本の美術行政およびアーツマネジメントの形成期に、いかに大きな役割を果たしたかについての研究に取り組んでいる。岩村透は東京美術学校(現在の東京藝術大学)の初代西洋美術史教授で、エジプト文明以来20世紀に至る欧米美術の、体系的把握を試みた最初の一人であったと今日再評価できる。それと同時に、雑誌『美術新報』『美術週報』などの編集を通じて、美術情報の蓄積と発信に多大な情熱を傾けた人物でもあった(註3)。岩村は1900年初頭から(病で48歳の若さで倒れる)最晩年に至るまで、数十種にもぼる英・独・仏・伊の海外雑誌や新聞から直接、様々な美術情報(美術家の訃報、展覧会情報、美術行政や都市の景観保護、美術界の裏話に至る)を収集し、それを日本の若い読者に向けてわかりやすい形で発信し続けた。また岩村は雑誌『美術新報』の編集長・坂井犀水と共に、近代日本初の『日本美術年鑑』(1911-13年)を刊行し、現代に至る美術年鑑の基礎を確立したことも知られる。つまり岩村透は、「事實は思想の母」であるという信念の上で、美術批評の範疇を単に西洋の前衛芸術の紹介と賞揚に限るのではなく、文化行政や美術経営に対する批評の基盤となる「美術情報の収集・分析・発信」、現代で言うところの「アート・ドキュメンテーション」の確立にも力を注いだのであった(註4)。

ところで岩村透が活躍した明治大正期こそ、日本における美術雑誌の全盛時代でもあった。雑誌が美術界の時々刻々の状況を伝えると共に、作品批評や、展覧会評、美術家同士の親睦や共闘の場ともなっていたことが、筆者自身も研究の中で実感されるようになった。明治大正期の美術批評家には、実作者であった人物も多い(高村光太郎、木下杢太郎、石井柏亭など)。振り返って現代、美術雑誌の廃刊が続く状況の中、「一体美術批評の場はどこにあるのか」という疑問は、筆者がこの十数年抱き続けてきたものである。いまや全国紙の新聞各社は美術展の事業主体ともなっている関係からか、新聞紙上の美術批評の目配りが広いとは到底言いがたい。また百年前の岩村透のような、美術情報の徹底的収集と公開こそが、報道の仕事であるという信念も見受けられない。一方で、ソーシャル・ネット

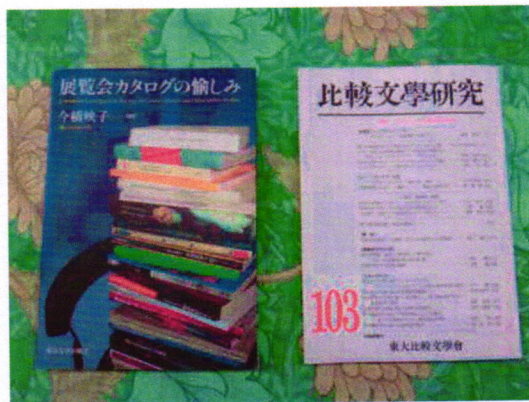


Fig. 1: 『展覧会カタログの愉しみ』(左)、『比較文学研究』(右)

ワークの急速な発達によって、多くは匿名のツイッターやブログによる美術批評や展覧会評は、それこそ奔流のように毎日流通している。もちろん首肯すべき意見もそこには多く含まれており、匿名なだけにむしろ遠慮無い鋭い意見もあって、現場にも直接届けば影響力も発揮し

よう。しかし美術批評の場は、責任ある報道や学術の世界から、匿名意見交換の世界にもはや移行してしまっただけであらうか。筆者も含め、学術の人間は、このような時代にどのような役割を果たすことができるのであろうか。

2……………展覧会&カタログ批評の20年(東大比較文学会の試み)

東大比較文学会は、半世紀を超える歴史をもつ学会である(註5)。早稲田大学(坪内逍遙)と東京大学(島田謹二)は、比較文学を日本に移入、確立した拠点として知られる。比較文学という学問の進展に伴い、研究対象は文学のみならず絵画、写真、映像、思想と幅広く扱い、実証的なテキスト研究を基盤に文学・文化理論を交差させる仕事、重んじられてきた。機関誌『比較文学研究』は年2回発行、半世紀の歴史を経て、2016年に第100号を刊行し、現在に至っている。

そもそも私自身が一編集委員として、東大比較文学会の雑誌『比較文学研究』の中で「展覧会カタログ評」のコーナーを設けようと考えた理由も、ある全国紙の書評欄を担当した折、ISBNが付いていない展覧会カタログは書評対象外だと知ったことがきっかけであった。ミュージアムの表看板として、その館の設立趣旨、収蔵品や他館との連携、学芸員の研究の成果などが多く反映される企画展が、今、どのように開催され、どのような優れたカタログがその記録として生み出されているのか、それを丹念に取り上げ、批評することもまた、学術が果たす役割なのではないか——そのように考えたのである。幸い編集委員会や学会員からの賛同も得て、第74号(1999年)から第103号(2017年)まで、18年間に約60本の「展覧会カタログ評」(正確には展覧会およびカタログ双方の批評)を掲載することができ、現在も継続中である(Fig.1, 表)。

ただし、いわゆる「美術史」専門でない研究者たちがなぜ展覧会&カタログ評を書く資格があるのかと訝る向きもあろう。しかし、私たちはむしろ「学際研究」を専門とする者としてこれを書いているのだという感覚がある。そこには近年のミュージアムでの企画展の性格もまた関係している。振り返ってみれば1980年頃までの日本の展覧会は、「ピカソ」展、「加山又造」展、「エコール・ド・パリ」展など、大作家の回顧展や人気流派の総合展の体を取っているものが多かったと言える。それに対し近年の企画展は、文化交流史、諸芸術間交渉、異文化表象、

ジェンダー論など、それこそ諸学問の壁を軽々と超えるようなテーマが、観客動員数と研究成果の向上を狙って設定されているのではないだろうか。私たちが「比較研究」(Comparative Studies)の視野から設定している軸は「文化の越境」と「ジャンルの越境」という二つの軸(あるいはその交差)である。そのような視点から批評欄に取り上げた展覧会は、例えば「来日450周年大ザビエル」展、「岡倉天心とボストン美術館」展、「異文化へのまなざし」展、「2002年ソウルスタイル」展、「瀧口修造の造形的実験」展、「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」展など、自分たちの専門に近い企画展が次々と挙がってくる。美術史専門で無くとも、少なくともその当該テーマに近い専門(地域、人物、方法論などを)、各評者がしっかり持っていればこそ、その企画展の良さをむしろ十全に語る資格があるのではないか——そこに自覚と自負をもって、ささやかな学術批評の一角を形成してきたのである。

2003年、筆者は最初の20本を取り纏めた上で、さらに関連するトピックを内外執筆者に依頼した上で、共著『展覧会カタログの愉しみ』(東京大学出版会)を刊行した(註6)。これを記念して同年秋、カタログ批評とは何かを問う大規模なシンポジウム(「展覧会カタログ批評の可能性」於東京大学)を開催したのだが、これは筆者にとっても学術的な刺激を大変に受ける機会となった。まずそこで話題とされたのは、美術展という絶対的なタイムリミットを伴うイベントに間に合わせるべく制作されるカタログは、出版物として特殊な性格をもつという観察である。だからこそ一般的な刊行物とは違う批評態度が求められるのではないか、という意見が多数出た。またアポリジニーと美術について語ったパネリストからは、「収集—保存—分析—展示」という経路を辿るミュージアム活動そのものが、いかに「西欧」「近代」的な営為であるかに意識を向けるべきであるという主張があり、これはまさしく私たちの活動の根源への自覚を促すものであった。

3……………大学内アーカイブ(駒場博物館資料室)の形成とその軌跡

さて2007年1月、国立新美術館が六本木に開館し、アートライブラリーが公開された。これは旧アートカタログ・ライブラリー(国際文化交流推進協会、1996-2004)が所蔵していたカタログ(約2万冊)を移管し、それを中核として、1945年以降国内展覧会の全てのカタログを収集・公開することを目的とした本格的図書館である。その多くにISBNが付いていない、つまり書籍として流通していない展覧会カタログを収集、分類、保存するには様々な困難があるが(註7)、2018年3月現在蔵書数は10万冊を超え(同館ホームページ公開蔵書統計に換る)、研究者にとっては必須の場所に成長した。また2004年以降、インターネット上の「美術図書館横断検索」(Art Libraries' Consortium: ALC)および東京文化財研究所資料閲覧室OPACの双方を検索することによって、一般的な図書館では網羅的に収集されていない展覧会カタログのほとんどについて、美術図書館等での所蔵の有無を瞬時

に検索できるようになった。

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館(以後、駒場博物館と略称)が資料室を立ち上げようとしたのも(註8)、偶然ながらこれとほぼ同時期にあたっている。駒場博物館は60年の歴史をもつ大学博物館であるが(Fig.2)、2003年、旧第一高等学校図書館であった由緒ある建築物(一時は教務課としても使用)を大々的に改修し、そこには新しく資料室のスペースも設けられた。偶然にも同時期となった2003年の共著刊行とシンポジウム開催をきっかけとして、博物館スタッフに協力して計画を練り、全く何もない状態から展覧会カタログ資料室の構築が始まったのである(Figs.3)。当時は国立新美術館の開館もまだ遠く、(民間の)アートカタログ・ライブラリーの活動も徐々に縮小していく状況の中、ともかく大学での研究教育に必要なカタログを、自分たちの手許に収集していくことが肝要だと考えた。ISBNが

表：『比較文學研究』所収 展覧会カタログ評目録

号	評者	展覧会タイトル	展覧会場	展覧時期
74号 (1999年7月)	藤田みどり	「米日四百五十年 大ザビエル」展	川崎市市民ミュージアム	1999年1月15日～3月14日
			山口県立美術館	1999年4月6日～5月30日
			東武美術館	1999年6月10日～7月20日
			鹿児島県歴史資料センター黎明館	1999年7月31日～8月29日
			岡崎市美術博物館	1999年9月11日～10月24日
	今橋映子	「薩摩治部八と巴里の日本人画家たち」展	長崎県立美術館	1999年11月12日～2月5日
			徳島県立美術館	1998年10月17日～12月6日
			そごう美術館(横浜)	1999年2月5日～3月7日
			奈良そごう美術館	1999年4月8日～4月25日
			静岡県立美術館	1999年4月10日～5月23日
75号 (2000年2月)	西横 偉	「東アジア 絵画の近代—絵画の誕生とその展開」展	兵庫県立近代美術館	1999年5月29日～7月11日
			島根県立近代美術館	1999年7月17日～8月29日
			宇都宮美術館	1999年9月12日～10月20日
			福岡アジア美術館	1999年10月30日～11月19日
中村和恵	「伝統と抽象—アジア系アフリカ人芸術家1945-1970」展	福岡アジア美術館	1999年7月17日～8月22日	
76号 (2000年7月)	内藤 高	「近代京都画壇と『西洋』：日本画革新の旗手たち」展	京都国立近代美術館	1999年8月6日～9月12日
	稲賀繁美	「岡倉天心とボストン美術館」展	名古屋ボストン美術館	1998年10月23日～1999年3月26日
	三浦俊彦	「イリヤ・カバコフ展 シャルル・ローゼンタールの人生と創造」展	水戸芸術館 現代美術ギャラリー	1999年8月7日～11月3日
77号 (2001年2月)	小泉順也	「ラファエル・コラン」展	静岡県立美術館	1999年9月10日～10月24日
			福岡市美術館	1999年10月30日～11月28日
			島根県立美術館	1999年12月4日～2000年1月16日
			千葉そごう美術館	2000年2月9日～3月5日
			愛媛県美術館	2000年4月8日～5月7日
			東京ステーションギャラリー	2000年5月27日～7月2日
	エリス俊子	「田中恭吉」展	町田市立国際版画美術館	2000年6月3日～7月19日
78号 (2001年7月)	藤岡伸子	「万国博覧会と近代陶芸の黎明」展	愛知県陶磁美術館	2000年4月8日～5月21日
	平石典子	「ナビ派と日本」展	京都国立近代美術館	2000年11月28日～2001年1月28日
	金森 修	「日本の博物図譜」展	新潟県立近代美術館	2000年9月15日～11月5日
79号 (2002年2月)	上垣外憲一	「心の交流 朝鮮通信使」展	国立科学博物館	2001年10月6日～11月11日
	京都文化博物館	2001年4月23日～6月3日		
80号 (2002年7月)	山屋真由美	「天上の青—瀧口修造の造形的実験」展	渋谷区立松涛美術館	2001年12月14日～2002年1月27日
	千葉一幹	「シュルレアリスト山本惺右」展	東京ステーションギャラリー	2001年8月22日～9月24日
	永井久美子	「江戸の異国趣味 南蕨風大流行」展	千葉市美術館	2001年10月30日～12月9日
81号 (2003年3月)	沼野恭子	「極東ロシアのモダニズム 1918-1928」展	町田市立国際版画美術館	2002年4月6日～5月19日
			宇都宮美術館	2002年5月26日～7月7日
			北海道立函館美術館	2002年7月16日～9月1日
	李 建志	「2002年ソウルスタイル 李さん一家の素顔の暮らし」展 「ソウル・ポップ2002—韓国大衆文化展—」	国立民族学博物館	2002年3月21日～7月16日
			世田谷美術館	2002年5月25日～7月14日
			新津市美術館	2002年2月8日～4月7日
高松市美術館	2002年8月2日～9月1日			
福岡アジア美術館	2002年11月12日～2003年2月12日			
82号 (2003年9月)	鈴木禎宏	「『生活』を『芸術』として—西村伊作の世界」展	神奈川県立近代美術館	2002年4月13日～5月19日
	宮坂奈由	「ダンス! 20世紀初頭の美術と舞踊」展	栃木県立美術館	2003年2月9日～3月23日
83号 (2004年3月)	西横 偉	「小山正太郎と『書ハ美術ナラス』論争の時代」展	新潟県立近代美術館	2002年10月4日～11月17日
	松井貴子	「明るい窓：風景表現の近代」展	横浜美術館	2003年2月1日～3月30日
	西原大輔	「韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術」展	京都国立近代美術館	2003年5月20日～6月29日
84号 (2004年10月)	大澤吉博	「江戸大博覧会—モノズリ日本」展	東京国立近代美術館	2003年4月3日～5月11日
	山中由里子	「アレクサンドロス大王と東西文明の交流」展	国立科学博物館	2003年6月24日～8月31日
	李 建志	「写真葉書で旅立つ近代紀行」展 「葉書で見る近代の話」展	東京国立博物館	2003年8月10日～10月5日
			兵庫県立美術館	2003年10月18日～12月21日
85号 (2005年3月)	大嶋 仁	「チャイナドリーム」展	釜山近代歴史館	2003年11月25日～2004年2月29日
			ソウル市立大学博物館	2003年12月1日～2004年6月30日
			兵庫県立美術館	2004年7月24日～8月29日
	徳盛 誠	「21世紀の本居宣長」展	福岡アジア美術館	2004年9月4日～10月17日
			新潟県立万代島美術館	2004年10月12日～12月5日
内藤 高	「万国博覧会の美術—パリ・ウィーン・シカゴ万博に見る東西の名品」展	川崎市市民ミュージアム	2004年9月18日～11月7日	
		東京国立博物館	2004年7月6日～8月29日	
		大阪市立美術館	2004年10月5日～11月28日	
		名古屋博物館	2005年1月5日～3月6日	
86号 (2005年11月)	佐藤宗子	「ビノッキオ—その誕生から現代まで」展	高松市美術館	2004年4月9日～5月9日
			呉市立美術館	2004年5月15日～6月27日
			和歌山県立近代美術館	2004年7月18日～9月23日
			おかざき世界子ども美術博物館	2004年10月2日～11月28日
			北海道立帯広美術館	2004年12月7日～2005年1月23日
			静岡アートギャラリー	2005年1月29日～3月13日
87号 (2006年5月)	西川正也	「ジャン・コクトー展—サヴァリン・ワンダーマン・コレクション」	うらわ美術館	2004年11月24日～2005年2月20日
			国立民族学博物館	2004年9月9日～12月7日
			北海道立近代美術館	2005年4月17日～5月29日
			日本橋三越本店	2005年7月20日～31日
山梨県立美術館	2005年8月6日～9月7日			
大丸ミュージアムKOBÉ	2005年9月14日～26日			
岩手県立美術館	2006年4月18日～5月21日			

87号 (2006年5月)	前島志保	「アジアのキュビズム——境界なき対話」展	東京国立近代美術館	2005年8月9日～10月2日
			徳壽宮美術館 (韓国国立現代美術館文館)	2005年11月11日～2006年1月30日
88号 (2006年10月)	陣岡めぐみ	「Alternative Paradise もう一つの楽園」展	シンガポール美術館	2006年2月18日～4月9日
	曾我晶子	「東京-ベルリン / ベルリン-東京」展	金沢21世紀美術館	2005年11月5日～2006年3月5日
89号 (2007年5月)	今野喜和人	「詩人の目・大岡信コレクション」展	森美術館	2006年1月28日～5月7日
			ベルリン国立美術館	2006年6月8日～10月3日
			三鷹市美術ギャラリー	2006年4月15日～5月28日
	手島崇裕	「マンダラ展——チベットのネパールの仏たち」展	静岡コンベンションアーツセンター	2006年8月3日～26日
			福岡県立美術館	2006年11月3日～12月10日
			足利市立美術館	2007年2月10日～3月25日
90号 (2007年10月)	安藤智子	「イメージの迷宮に棲む 柄澤斎」展	国立民族学博物館	2003年3月13日～6月17日
	佐藤 温	「近代文人のいとなみ」展	名古屋博物館	2004年4月10日～7月4日
	伊藤由紀	「森鷗外と美術」展	埼玉県立近代美術館	2006年7月8日～9月24日
91号 (2008年6月)	前島志保	「アジアのキュビズム」ソウル展	徳壽宮美術館 (韓国国立現代美術館文館)	2005年11月11日～2006年1月30日
	深見 麻	「大正シク」展	東京都庭園美術館	2007年4月4日～7月1日
92号 (2008年11月)	佐藤 光	「青山二郎の眼」展	尾道市立美術館	2007年7月28日～8月26日
			MIHO MUSEUM	2006年9月1日～12月17日
	李 建志	「文化的記憶——柳宗悦が発見した朝鮮と日本」展	愛媛県立美術館	2007年1月26日～3月4日
			新潟市美術館	2007年4月6日～5月13日
93号 (2009年6月)	林久美子	「ワレヘ——洋画家たち百年の夢」展	世田谷美術館	2007年6月9日～8月19日
			韓国ソウル市 一民(イルミン)美術館	2007年11月10日～2月12日
94号 (2010年1月)	川島 健	「十二の旅——感性と経験のイギリス美術」展	東京藝術大学大学美術館	2007年4月19日～6月10日
			新潟県立近代美術館	2007年6月23日～8月5日
			MOA美術館	2007年8月17日～9月30日
95号 (2010年8月)	吉岡知子	「躍動する魂のきらめき——日本の表現主義」展	栃木県立美術館	2008年4月27日～6月22日
			静岡県立美術館	2008年9月12日～10月26日
96号 (2011年6月)	寺田寅彦	「フランスの浮世絵師 アンリ・リヴィエール」展	富山県立近代美術館	2008年11月2日～12月23日
	定村米人	「江戸の粋・明治の技 柴田是真の漆×絵」展	世田谷美術館	2009年1月10日～3月1日
97号 (2012年10月)	堀江秀史	「第三回恵比寿映画祭 デイ・ルーム・ピリパー!!」	東京国立近代美術館	2008年10月31日～12月21日
	水野太朗	「異色の芸術家兄弟——橋本平八と北園克衛」展	東京国立博物館表慶館	2009年1月10日～3月8日
98号 (2013年10月)	任 ダハム 申 改正	「渋谷ユートピア 1900-1945」展 「もうひとつの川村清雄展」	福岡市立美術館	2009年5月2日～6月14日
			大阪市立美術館	2009年8月4日～9月6日
99号 (2014年8月)	三松幸雄	「アートと音楽——新たな共感覚をもとめて」展	栃木県立美術館	2009年4月26日～6月15日
	金 志映	「生誕125年 萩原朔太郎展」	兵庫県立美術館	2009年6月23日～8月16日
100号 (2015年6月)	松枝佳奈	「国立トレチャコフ美術館所蔵 レービン展」	名古屋美術館	2009年8月25日～10月12日
			岩手県立美術館	2009年10月20日～11月29日
			松戸市立博物館	2009年12月8日～2010年1月24日
102号 (2017年2月)	岡野 宏	「オート・クンクリ」展	石川県立美術館	2009年7月24日～8月23日
			神奈川県立近代美術館	2009年9月15日～10月12日
103号 (2017年10月)	田村 隆 古館 遼	「全点一挙公開源氏物語絵巻」展 「赤瀬川原平の芸術言論展——1960年代から現在まで」	山口県立萩美術館	2009年10月12日～12月16日
			三井記念美術館	2009年12月15日～2010年2月17日
100号 (2015年6月)	岩下弘史	「夏目漱石の美術世界」展	相国寺承天閣美術館	2010年4月3日～6月6日
			富山県水黒美術館	2010年6月25日～8月22日
			東京都写真美術館	2011年2月18日～27日
			三重県立美術館	2010年8月17日～10月11日
			世田谷美術館	2010年10月23日～12月12日
			渋谷区立松濤美術館	2011年12月6日～2012年1月29日
			目黒区美術館	2012年10月20日～12月16日
			東京都江戸東京博物館	2012年10月8日～12月2日
			東京都現代美術館	2012年10月12日～2013年2月13日
			世田谷文学館	2011年10月8日～12月4日
102号 (2017年2月)	岡野 宏	「オート・クンクリ」展	Bunkamura ザ・ミュージアム	2012年8月4日～10月8日
			浜松市美術館	2012年10月16日～12月24日
103号 (2017年10月)	田村 隆 古館 遼	「全点一挙公開源氏物語絵巻」展 「赤瀬川原平の芸術言論展——1960年代から現在まで」	姫路市立美術館	2013年2月16日～3月13日
			神奈川県立近代美術館	2013年4月6日～5月26日
100号 (2015年6月)	岩下弘史	「夏目漱石の美術世界」展	東京藝術大学大学美術館	2013年5月14日～7月7日
			広島県立美術館	2013年3月26日～5月6日
102号 (2017年2月)	岡野 宏	「オート・クンクリ」展	東京都庭園美術館	2015年10月10日～12月27日
			ディ・ノイエ・ザムルング—国際デザイン美術館(ミュンヘン)	2013年3月9日～4月7日
103号 (2017年10月)	田村 隆 古館 遼	「全点一挙公開源氏物語絵巻」展 「赤瀬川原平の芸術言論展——1960年代から現在まで」	MUDAC現代デザイン応用芸術美術館(ローザンヌ)	2014年7月2日～10月5日
			徳川美術館	2015年11月14日～12月6日
103号 (2017年10月)	田村 隆 古館 遼	「全点一挙公開源氏物語絵巻」展 「赤瀬川原平の芸術言論展——1960年代から現在まで」	千葉市美術館	2014年10月28日～12月23日
			大分市美術館	2015年1月7日～2月22日
103号 (2017年10月)	田村 隆 古館 遼	「全点一挙公開源氏物語絵巻」展 「赤瀬川原平の芸術言論展——1960年代から現在まで」	広島市現代美術館	2015年3月21日～5月31日



Fig 2: 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館

付かず書店経由で購入できない国内美術館、博物館等のカタログを、アルバイト等を使って一点一点買い求めていくという作業となる。大学ゆえに予算も極めて限られる中、駒場キャンパスで学んでいる院生、学部生にとりわけ必要と思われる「学際的企画展」に的を絞り、学術的に価値の高いカタログを選別した上で、購入していくという計画を立てたのである。それから早や15年、2018年4月現在、収蔵数は17,000冊(他に雑誌紀要類・781種)を超えた。もちろん数自体から見れば、国立新美術館所蔵数の五分之一にも満たないが、「選択と集中」という原則を立ててきた御蔭で、専門のアートキュメンタリストから「純度の高い図書室」というお墨付きを頂けるまでに成長することができた。現在では、学内の学生、院生、教職員のみならず、学外(「駒場友の会」の入会者)にも開かれた場所として信頼されている。大学組織としては極めて珍しい専門資料室と言うことができるだろう。

この資料室をスタートさせた当初、国内美術館等に、(予算の関係から)カタログの寄贈を呼びかけた際、ある地方美術館の学芸員の方からそれを承諾する嬉しい御返事と共に、「できれば大学図書館が公開しているOPACにきちんと登録して頂ければ、こちらも、自分たちの活動成果が広く知られるきっかけとなるので嬉しい」という、大変

貴重な御意見とアドバイスを頂くことができた。駒場博物館は早速、駒場図書館と連携を取って図書登録のシステムを構築し、2007年6月に正式に、教養学部長のテープカットをもって開室するに至った。学部の正式な組織となることができたのも、博物館スタッフと図書館スタッフが共に、展覧会カタログを大学内の一箇所にアーカイブすることの意義を深く理解し、教員たちの研究成果や理念を支援して頂いた結果であったと思う。そして2009年からは専門司書(嘱託)による整理、保存体制も整えて、今に至っているのである。博物館スタッフの強い意向により、資料室は「保存」より「使用」を重視し、通常的美術図書室では不可能であるカタログの「貸出」も、論文を書く院生・学部生のために、一定条件のもとで積極的に行っている。

筆者もこの数年、駒場博物館にある演習室と資料室の双方を同時に使用して、学部生や大学院生のために、展覧会カタログを使用しながら「比較芸術」「比較文化論」の理論を学ぶ、といった趣旨の授業を展開している。資料室に籠もりきりになる時間、学生・院生たちの集中ぶりには驚くものがあり、様々な「収穫品」を抱えて来ては、「推シログ」(=推奨するカタログを指す彼らの造語)自慢をしあっている。そういう光景を見るときほど、こままでの苦勞が実った——と、感慨深い時間はない。

4……………大学博物館と大学院生委員会の連繫

さて先に駒場博物館資料室のカタログ収集の原則は、「選択と集中」であると言ったが、その「選択」のためには、「何を選択すべきか」という情報の精練が当然必要となる。かつて淡交社が毎年刊行していた『日本の美術館と企画展ガイド』(1997-2004年)という大変優れた、便利なムックが存在したのだが、不幸にも私たちのアーカイブが開設される頃には廃刊されてしまった。一方2018年現在ではインターネット上の検索エンジン、例えば国立新美術館の「アートコモンズ」(全国展覧会情報検索)や、民間の「アートスケープ」(サイト内の展覧会スケジュール検索)などが非常に便利な存在になってきた。そうしたツールが生まれる前、筆者が東大比較文学会の編輯委員として展覧

会調査のために立ち上げたのが、「展覧会・カタログ院生委員会」(2004年10月-現在)である。数名~十名ほどの大学院生(文学、芸術、思想、歴史系)がボランティアの一年間任期で担当する。企画展の情報が全国のミュージアムで公開される4月頃に、独自の共有エクセル表を用いて、全国約150箇所を分担して調査する。HP上に情報が無いものは、直接電話等で問い合わせ、差し障りのない範囲で教示を願い、全体表に反映させる。GW明けには完成し、そのエクセル表の中から一年間の購入計画を立て、博物館のティーチングアシスタントが購入を進めていく……このルーティンをこの十数年で造り上げてきた。学外のインターネット上の検索エンジンが充実してきた今でも、



Figs.3 : 同館展覧会カタログ資料室

自分たちの専門に近いミュージアムを予め選り抜いたエクセル表で、しかも、さまざまにソートがかけられる状態で使用できるこのシステムは、極めて使い勝手が良い。院生たちはこれまでも数度にわたり、システムに委しいメンバーがエクセルを改良して今に至っている。毎年院生たちにとっても新学期は多忙だが、それでもこれに携わった元メンバーは、全国のミュージアムの情報に直接接して得た新鮮な体験を後に語ってくれている。

さらに院生委員会には、このエクセル表の中から、雑誌『比較文学研究』の展覧会カタログ評欄で取り上げるべき展覧会および評者を、毎年1-2本決めるというミッションを托した。評者の資格は博士課程以上の院生および出身者である。院生同士だからこそ共有する情報もあり、これによって(教員が知らない)院生やOBOG一人一人の幅広い興味を引き出され、例えば思想系の院生が、音楽やジュエリーの展覧会評を担当するなど、思わぬ成果が挙がっている。

院生委員にとってこの委員会はボランティアながら、一方で雑誌『比較文学研究』の編集の一端に参画し、一方で駒場博物館資料室のアーカイブ形成に関わるという「学術活動」に携わる良い経験となる。普段はゼミで分断されている院生同士の交流の場になるだけでなく、博物館スタッフとの実務的なやりとりや学外組織との接触など、とかく孤独になりがちな大学院生の社会生活を担保するという教育的配慮もある。委員会メンバーはカタログ特別貸出、副本の無償提供(年1回「カタログ感謝祭」の開催)、展覧会招待券の融通など、様々な思慮も用意され、その仕事が負担にならないよう教員側は最大限の注意を払っている。委員は原則年1交代のため、十数年間で参

加者はすでに百名を超え、大学院修了後は、大学教員以外にも美術館学芸員、財団職員、図書館司書、新聞社事業部社員など、カタログと直接関わる専門職に就いた者も多い。当初は予想もなかったのだが、実際に展覧会カタログの制作や流通の側に立った人たちが、何人もあらわれたのである。こうした歴史を辿れば、私たち教員の方が逆に、院生委員会の存在意義を後から噛みしめることとなった。

ところで院生委員会では毎年、なるべくテーマを一つ設定した上で、小さなプロジェクトを実施することになっている。中でも2007年度実施の「文学館情報収集プロジェクト」は、比較文学比較文化研究室に属する院生の半数以上が文学専攻であるという特色を活かした、意義あるものとなった。通常、先述の「アートコモンズ」や「アートスケープ」の検索エンジンには、例えば世田谷文学館や日本近代文学館などはまだしも、文学館情報は網羅されていない。ところが今や、神奈川県立近代文学館や国文学研究資料館は言うに及ばず、森鷗外記念館、いわき市立草野心平記念文学館、宮澤賢治記念館、野田宇太郎文学資料館など、優れた企画展と(多くは廉価な)パンフレットを制作している文学館は数多い。しかし一方で、2007年の調査によれば、通常展示のみで運営されている文学館が多いのも実態で、それが必ずしも良い結果を生んでいない例も見受けられる。文学館の企画展の意義とそのカタログが持つ意味については、美術展とは別途に、今後学術的考察が必要だろう(註9)。そしてその基礎資料となるカタログを、ミュージアム情報の中に同居させるという発想こそが、私たち学際研究に携わっている者が拘るべき点であると、改めて認識するのである。

5……………展覧会カタログ表彰(CatalTo)の開始——親睦・感興・公共性

さて先述した院生委員会は、2013年10月に10周年を迎え、それを記念して「展覧会カタログをめぐるこの10年——研究、教育、展覧の現場から」というラウンドテーブルを催した(註10)。パネリストの一人、元駒場博物館資料室TAであり、現在国立西洋美術館・主

任研究員の陳岡めぐみ氏が、その発言の中で実に興味深い活動について触れた。それが、CatalPaという活動である。CatalPaは、Catalogues d'exposition de Paris の愛称であり、2012年度からフランスのパリにて有志団体が行っている「パリ(および近郊)のミュージ

アムにおける企画展覧会カタログに対する表彰」活動である。特定の団体ではなく、知識人や芸術家の有志たちが、自由な視座から選択表彰しているところに特徴がある。初期は表彰式もビストロなどで行われていたが、何年か前からはパリ第三区庁舎で、優雅な音楽会付きの小宴として催されているようである。その模様はYoutubeでも公開されている。例えば2016年度は、61に及ぶノミネート展覧会カタログの中から、「カタルパ賞」が、「アポリネール：詩人の眼差し」展（ガリマール、オルセー美術館）に、そして「特別賞」が、「現代芸術のアイコン」展（ガリマール、ルイ・ヴィトン社）と「ビート・ジェネレーション」展（ボンビドー美術館）に贈られた。

私たちはこの粋な表彰活動に倣って、東京でもこれを試みることはできないかと考え、2016年に一年の準備期間を設けた上で、2017年に第1回を開催することができた。CatalToの日本語名称は、「展覧会図録品評勝手連TOKYO」である。着想の源泉であるCatalPaと同じく展覧会カタログを品評し、愉しむことを目的としているが、パリ版とは異なり、エスタブリッシュされた知識人有志ではなく、東大比較文学会の大学院生を中心に他大学院生や、若手OB・OGと教員たちが構成されている自由な組織である。「勝手連」という名称には、常に謙虚でありたいという私たちの願いも込められている。いわゆる専門家集団というより、1年間に出版された展覧会カタログを内容、装幀、学術的価値等のさまざまな観点から自由に品評し合い、とくに優れたものに敬意を表し、ささやかな賞を「勝手に」贈る——という活動なのである。ちなみに、第1回CatalTo2016には、100冊あまりのノミネートから、以下が選ばれた。当日配布された受賞理由をそのまま引用する——

- CatalTo総合賞（学術性やデザイン性、獨創性、娯楽性など総合的に見て良質です）
『色の博物誌 江戸の色彩を視る・読む』（目黒区美術館）
- CatalTo学術賞（論文や解説、書誌等が充実し、特に高い学術的価値を賞します）
『シャセリオー展 19世紀フランス・ロマン主義の異才』（国立西洋美術館）
『花森安治の仕事 デザインする手、編集者の眼』（世田谷美術館）
- CatalTo印刷賞（出品作品の図版や画像の再現性や色彩の美しさを賞します）
『並河靖之七宝 明治七宝の誘惑 透明な黒の感性』（東京都庭園美術館）
- CatalTo薄くても良いで賞（小規模ながら、解説・情報等の量や質の水準が高いです）
『近代日本のイタリア発見 岩倉使節団の記録から』（久米美術館）
- CatalTo一般にオススメで賞（高い獨創性や娯楽性も備え、ぜひ多くの読者に手に取っていただきたいです）
『南極建築 1957-2016』（LIXILギャラリー1）
- CatalTo国際交流賞（外国の美術館や博物館との緊密な協力を賞します）
『漢字三千年 漢字の歴史と美』（東京富士美術館）
- CatalToポスター賞（優れた特色があり、デザイン性が高いと賞されるポスターです）
『女たちの絹絵 ベトナム絹絵画家グエン・ファン・チャン 3rd絵画保存修復プロジェクト展』（上野の森美術館ギャラリー）

ご覧の通り、パリ版と違って東京のCatalToでは、大賞の他に毎年可変的に、様々な受賞理由の「賞」を設けようということになった。賞の名前も、若い人たちが自由に考案したものになっている。受賞カタログには特製の「腰帯」を巻いて、受賞理由をそれぞれ手書きし、その後駒場博物館資料室でもその形で保存される。さらには、展覧会カタログ周辺に位置するポスターの存在に目を向けたことも、新しい試みと自負している。

かくして2017年7月に、受賞美術館の展覧会担当学芸員の方々などの関係者が出席の上、文字通り手作りの表彰式がおこなわれたのであった。同時に、駒場博物館資料室の10周年記念式典も教養学部長臨席の上で行われ、私たちもはや10年の時の流れを実感することとなった（Figs.4）。

さらには2018年4月、駒場博物館の常設展示として「美術展を本の世界で」（2018年4月2日-27日）が行われ、『比較文学研究』での展評対象のカタログおよびCatalTo受賞カタログ等が全て展示された。同展では展示カタログがすべて手にとって読むことができるという図書室的環境を創出し、この初めての試みが好評であったため、今後も毎春の恒例展示になる予定である（註11、Figs.5）。

CatalToの実行を院生たちに促したときに私が驚いたことは、彼らが思いの外積極的にこのプロジェクトに案を出し、院生委員会の活動が「実質」として学外に公表されることを喜んだことである。CatalToのロゴや腰帯デザインが創案され、当日は「勝手連TOKYO」ならではの、大賞カタログのテーマ「江戸の色彩」にあやかって、パーティーに「江戸小物」のドレスコードが提案されるなど、楽しい一日となった。そしてそれ以上に私たちがさらに驚いたのは、ご招待した美術館や



Figs.4: 第1回展覧会図録品評勝手連TOKYO時の風景



Figs.5:「美術展を本の世界で」展のポスターと展示風景

文学館関係者の方々が悉く、この表彰を心から喜んで下さったこと
であった。まさしく「勝手に」表彰させて頂いたこちらとしては、恐
縮するばかりであったが、逆にこうした表彰活動がいかに公共性をも

ち、ある意味責任の生ずる行為であるかを再確認する場ともなった
のである。このプロジェクトは今後、できるだけ長く続けていきたいと
願っている。

6……………〈大学〉と〈ミュージアム〉——批評の公共性のありか

以上、筆者が偶然の出来事の連なりから、思ってもみないほど長
期間関わってきた活動について振り返ってきた。「美術批評の場はど
こか」という自分自身の問いが、それによって一挙に解決されたわけ
ではもちろんない。しかし、大学という場にミュージアムと関わりながら
出来ることがあるとすれば、それは一つには情報の客観的かつ総合
的な収集と保存、分析であり、もう一つにはそれに基づいた自由で正
当な批評活動であろう——という最初の予感はやはり正しかったの
ではないかという思いを深くしている。もちろん大学という枠内だからそ
の限界や問題点も多々ある。例えばアーカイブ活動に関しては、何と
言っても資金に限られているため、網羅的な収集にはならないという点
が大きいだろう。駒場博物館資料室のキャパシティも自ずと限界が
あり、未来永劫のコレクションはなかなか難しいかも知れない。また展
覧会カタログ批評についても、雑誌媒体に掲載する以上は圧倒的に

取り上げる対象の数が少なく、それをCatalToで補う形になるであろう。
また院生委員会は毎年メンバーが交代するため、人的継続性に常
に問題が生じているのも確かなのである。

こうしたあらゆる問題を解決してなお、これらの活動を続ける意味が
あるとすれば、それは結局、カタログアーカイブとカタログ批評は、教員
や院生の研究生生活と直結する部分がある、という点が肝要なのかも
しれない。つまりこうして形成されたアーカイブと、書かれた批評文は、今
度はそれ自身が批評される対象となっていくからである。ミュージアム活
動の表看板になりうる企画展の構想と成果が、こうして大学人や若い
研究者たちの思考を刺激し、それが研究の一端となり、そしてその成
果が逆に社会で評価、批評されていくという循環こそ、学問とミュージ
アムが社会の中で相互作用を生み出していく理想形なのではないか
——十数年にわたる試行錯誤の中で、私は今そのように考えている。

[註]

1. 以後本文中「ミュージアム」と書く場合には、断りのない限り筆者の意図として、美術館、博物館や文学館などまで含めて指すこととする。
2. 展覧会カタログには常設展カタログも含まれるが、本論では基本、企画展カタログを念頭に置いている。
3. 拙論「雑誌『美術新報』改革と岩村透・坂井岸水——大逆事件とポスト印象派の時代に」(『超越文化科学紀要』第19号、2014年11月)
4. 拙論「明治大正期日本のアート・ドキュメンテーション——美術批評家・岩村透による国内外美術情報の構築とその思想(上)／(下)」(『超越文化科学紀要』第22号、2017年10月／同第23号、2018年10月)
5. 東大比較文学会は、1954年創立。東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化研究室の大学院生、出身者、教員を中心に構成される学術団体。機関誌『比較文学研究』(年二回発行)。
6. 今橋映子編著『展覧会カタログの愉しみ』(東京大学出版会、2003年)
7. 同書、pp.231-232の参考文献を参照されたい。
8. 駒場博物館は、美術博物館(1951年設置、代表的収蔵品:デューシャン「ガラス」東京ヴァージョン)と、自然科学博物館(1953年設置)の双方を総称する名称である。
9. 文学館についての総合的研究については、図書館情報学の岡野裕行氏が代表を務める「文学館研究会」(<http://literarymuseum.net>)の研究成果と活動が参考になる(ただし岡野氏もまだ、文学館における展覧会(とカタログ)についての集中的考察はされていないようである)。
10. このラウンドテーブルの様子は、記録冊子にまとめられ、駒場博物館HPにてPDFが公開されている(<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/publication.html>)。
11. この展覧会については、駒場博物館のHPを参照されたい(<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/exhibition.html> - Catalogues2018)。

[寄稿者紹介]

小池一子(こいけかずこ): 1936年、東京都生まれ。早稲田大学文学部卒業。クリエイティブ・ディレクター。十和田市現代美術館館長、武蔵野美術大学名誉教授、京都服飾文化研究財団評議員。主な編著作に「素手時然」(原研哉共編、2015年、良品計画)、「イツセイさんはどこから来たの? 三宅一生の人と仕事」(2017年、HeHe)など。主な企画した展覧会は「日本のライフスタイル50年—生活とファッションの出会いから展」(1998-9年、宇都宮美術館ほか)、「少女都市」(2000年、第7回ヴェネチア・アービエンナーレ国際建築展日本館)など。

梶田倫広(ますだともひろ): 1982年、東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。専門は戦後美術史。2010年より東京国立近代美術館研究員。これまで携わった主な展覧会に、「あなたの肖像—工藤哲巳回顧展」(2014年)「高松次郎ミステリーズ」(2014年)「No Museum, No Life—これからの美術館事典」(2015年)(いずれも共同キュレーション)。

福住廉(ふくずみれん): 1975年、東京都生まれ。美術評論家。九州大学大学院比較社会文化学部博士後期課程単位取得退学。著書に「今日の限界芸術」(BankART 1929、2008年)、共著に「日本美術全集第19巻 拡張する戦後美術」(小学館、2015年)、「どうぶつのはな」(羽鳥書店、2016年)など。展覧会の企画に「今日の限界芸術百選」(まつだい「農舞台」、2015年)など。現在、東京藝術大学大学院、女子美術大学、多摩美術大学、横浜市立大学非常勤講師。

今橋映子(いまはせいこ): 1961年、東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。東京大学大学院教授。専門は比較文学・比較文化。主な著作に「異都懂懂 日本人のバリ」(柏書房、1993年、サントリ学芸賞ほか)、「バリ・貧困と街路の詩学—1930年外国人芸術家たち」(都市出版、1998年)、「バリ写真」の世紀」(白水社、2003年、日本写真協会学芸賞ほか)、「展覧会カタログの愉しみ」(東京大学出版会、2003年、編著)、「フォト・リテラシー」(中公新書、2007年)など。

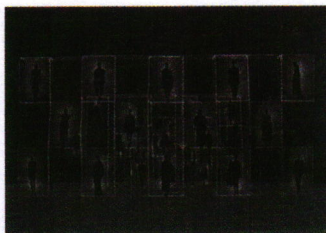
アレクサンドル・サムソン(Alexandre Samson): バリ市立衣装美術館(バレガリエラ)現代クリエーション部門を担当する服飾史家。ルーヴル学院卒業。服飾史家オリヴィエ・サイヤール氏の2010-15年にかけてのパフォーマンスや展覧会に数多く携わったのち、「Fashion Mix, Mode d'ici créateurs d'ailleurs」展(Palais de la Porte Dorée, 2015年)では共同でキュレーターを務める。主な展覧会に「Margiela / Galliera 1989-2009」展など。

パオラ・アントネッリ(Paola Antonelli): ニューヨーク近代美術館(MoMA)の建築・デザイン部門シニア・キュレーター兼研究開発(R&D)部門ディレクター。文筆家や編集者としても活動。イタリア生まれ。ミラノ工科大学建築学部でラウレア(学位)取得。2014年にはロイヤル・カレッジ・オブ・アートより名誉博士号授与。建築・デザイン分野の雑誌「Domus」の編集者、カリフォルニア大学ロサンゼルス校講師などを経て現職。主な展覧会に「Mutant Materials in Contemporary Design」展(1995年)、「Workspheres」展(2001年)など。

田中雅子(たなかまさこ): 1983年、熊本県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業後、渡仏。Institut d'Etudes Supérieures des Arts (IESA) Marché de l'art学科を修了。2014年より東京都庭園美術館学芸員。企画した主な展覧会に「クリスチャン・ボルタンスキー アニミタス—さざめく亡霊たち」(2016)、「装飾は流転する」(2017)他。また同館で2015年にスタートしたパフォーマンスアーツのプロジェクト「TTM:IGNITION BOX」の企画も行つた。

谷口依子(たにぐちよりこ): 東京都生まれ。戸栗美術館学芸員、女子美術大学美術館学芸員を経て、2014年より姫路市立美術館学芸員。東北大学大学院文学研究科歴史学専攻美術・西洋美術史博士前期課程修了。専門は近現代美術史。携わった展覧会は「海を渡った伊万里焼—鎮国時代の貿易陶磁—」(2011年)、「版の時間」(2012年)、「没後20年ルーシー—調和の器・永遠の憧れ」(2015年)、「バロックの巨匠たち」(2017年)など。

編集後記: ミュージアムとは何か。今号では、このミュージアムという場を成立させている主要な人びとに現状や課題について論じていただく、という構成をとっています。それぞれのアクターの内実や環境が変化し、さらに、このような場そのものが変容しないし互解しているなかで、私たちはいかなる取り組みが可能なのでしょう。いよいよ来年には、KCIが5年に1度実施している特別展が開催いたします。また今回の特別展は新体制となって、初めての展覧会です。ミュージアムの歴史と現状を冷静に分析しながら、内なる情熱に支えられた、新たな試みに挑戦してみる。それは何か閉塞感の漂う現在に必要なことなのかもしれません。(M・O)



表紙: 「Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion」展(ロンドン: パービカン・アート・ギャラリー、2010年)を会場デザインした藤本壮介氏による初期段階の展覧会イメージ © Sou Fujimoto Architects



裏表紙: 「COLORS ファッションと色彩」展 京都国立近代美術館 2004年 © The Kyoto Costume Institute, photo by Naoya Hatakeyama



右頁: 「Luxury: ファッションの欲望」展(京都・東京、2009-10年)出展作品、ドレス マルタン・マルジェラ 2008年春夏 京都服飾文化研究財団所蔵 Dress, MARTIN MARGIELA, Spring/Summer 2008, Collection of The Kyoto Costume Institute

Fashion Talks... 第8号

[服飾研究]

2018年10月1日発行

発行者: 塚本能交

編集: 石関 亮、小形道正、松坂雅子

発行: 公益財団法人 京都服飾文化研究財団

〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所内南町103

電話: 075-321-9221 <http://www.kci.or.jp/>

デザイン: 西岡 勉

組版: クラフティデザイン

印刷・製本: 株式会社サンエムカラ

Fashion Talks... Vol. 8

The Journal of The Kyoto Costume Institute

Publisher: Yoshikata Tsukamoto

Edited by Makoto Ishizeki, Michimasa Ogata,

Masako Matsusaka

Published by The Kyoto Costume Institute

<http://www.kci.or.jp/>

Designed by Tsutomu Nishioka

Typeset by Krafty Design

Printed and bounded by Sun M Color

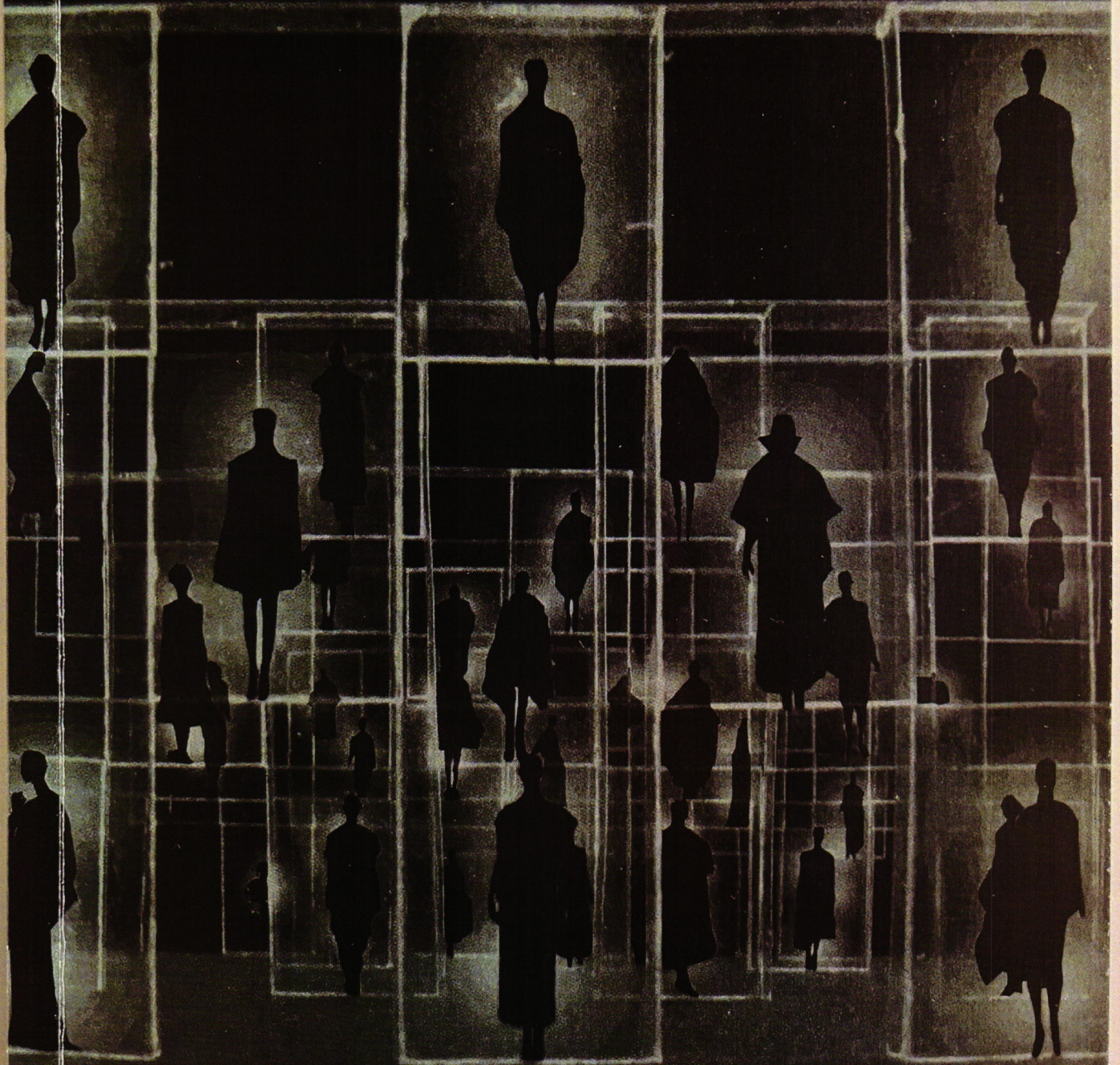
© 2018 by The Kyoto Costume Institute

Printed in Japan



公益財団法人京都服飾文化研究財団 [服飾研究] The Journal of The Kyoto Costume Institute ISSN 2432-1648

Fashion Talks...



KCI40th
Anniversary

VOL.8 AUTUMN 2018 特集:ミュージアム②

on museum